

弥生青銅器の成立年代

Date of the Formation of the Yayoi Bronze Implements

春成秀爾

HARUNARI Hideji

- ① 弥生前期の年代
- ② 遼寧式銅劍の年代
- ③ 青銅器鑄造の開始年代
- ④ 弥生青銅器の成立

【論文要旨】

炭素14年代を測定し、暦年校正した結果によると、北部九州の弥生前期の板付Ⅰ式は前780年頃に始まる。南四国も前8世紀のうち、板付Ⅱa式併行期に始まる中部瀬戸内の前期は前7世紀、近畿の前期は前7～6世紀に始まる。すなわち、弥生前期は西周末頃に併行する時期に始まり、前380～350年の間、戦国中期に終わる。

弥生前・中期の展開を考古学的に追究するうえで、青銅器の年代は重要な意味をもっている。日本出土の青銅器のうち年代がはっきりしている最古例は、福岡県今川遺跡出土の遼寧式銅劍の鋒と茎を銅鏃と銅鑿に再加工した例であって、板付Ⅰ式に属する。同様の例は朝鮮半島では忠清南道松菊里遺跡などから出土しているので、ほぼ同時期と考えてよいだろう。松菊里式の校正年代は前8世紀であるので、板付Ⅰ式の炭素年代とも整合する。

青銅器鑄造の開始を証明する根拠は鑄型の出土である。現在知られている資料では、近畿では和歌山県堅田遺跡から銅鑄の鑄型が前期末の土器とともに見つかった。北部九州では、福岡県庄原遺跡の銅鑄の鑄型が中期初めないし前半の土器と出土している。また、中期初めの甕棺墓に副葬してあった銅戈に朝鮮半島の銅戈と区別できる北部九州独特の型式が知られているので、中期初めには青銅器の鑄造が始まっていたとみられる。弥生前期の存続期間が著しく伸びたので、北部九州の中期初めと近畿の前期末とが実年代では一部重なっていないかどうかの検討が必要である。

銅鐸は愛知県朝日遺跡から最古型式の銅鐸の鑄型が中期初めの土器とともに見つかった。同時期の石川県八日市地方遺跡出土の木製堅杵のみに知られている独特の羽状文を身に施しているのので、北陸の集団も関与して銅鐸が創出されたことは確かである。朝日遺跡から出土した銅鐸鑄型だけでは、最古の銅鐸の鑄造が中期初めに濃尾平野で始まったとまでは断定できないとしても、きわめて重要な手がかりが得られたことはまちがいない。

①……………弥生前期の年代

炭素14年代を測定し、暦年較正した結果によると、北部九州の弥生前期の板付Ⅰ式は前780年頃、板付Ⅱa式は前700年頃に始まる。南四国も前8世紀に始まっている。板付Ⅱa式に併行する時期に始まる本州の弥生前期は、前700年以降ということはできるが、炭素14年代を測定し較正年代を得ようとする、「前2400年問題」にかかり、年代をしぼりこむことは困難となる。それでも「前2400年問題」の前半か後半かの判断ができる例があり、それらを採用すると、南四国では南国市田村遺跡では前8世紀初め、瀬戸内のⅠ期古段階（前期初め）は前8世紀後半～末頃、近畿のⅠ期古段階（前期初め）は前7世紀前半ないし中頃に始まる。すなわち、弥生前期は西周末ないし春秋初めに併行する時期に始まると考えることができる。

前期の終わりは、北部九州から近畿の範囲では、前380～350年の間にくるだろうと推定している。しかし、土器型式の変化にもとづいて時期区分をおこなっているため、例えば北部九州の前期末と近畿の前期末とが、実年代でも厳密に一致するという証明ができていない。前期末と中期初めの境界は戦国中期と考える。

ここでは、弥生前・中期の実年代を考古学的にも追究するうえで、重要な意味をもつ青銅器の年代を取りあげて検討しておきたい。

②……………遼寧式銅劍の年代

1) 遼寧式銅劍の起源と変遷

遼寧式銅劍の起源について、日本の研究者の間では遼寧省西部の小黒石溝—南山根の系列を想定し、これらを前9世紀とみなして最古とする遼西起源説が有力であった。そして、遼西の遼寧式銅劍を模倣し変型したのが遼東の遼寧省東部の双房—二道河子の系列であると主張された〔秋山1995：265～268、宮本2000：184～189〕。

しかし、遼寧式銅劍を型式学的に配列すると、遼東では古い様相をもつ双房銅劍や二道河子銅劍から新しい様相をもつ鄭家窪子銅劍まで揃っている（図1）。それに対して、遼西でもっとも古い様相をもつのは寧城県の汐子北山嘴銅劍であって、遼東の双房銅劍・趙王村銅劍ほどは古くなく、双砬子銅劍や二道河子銅劍と並ぶ可能性がある。汐子北山嘴銅劍に伴出の中原製青銅礼器の年代は前9世紀とされている。すなわち、遼寧式銅劍の起源は遼東にあり、最古型式の双房銅劍やそれにつづく趙王村銅劍の年代は前11～前10世紀までさかのぼると私は予想する〔春成2006：75〕。

遼東には、撫順市望花遺跡と鉄嶺市法庫県湾柳街遺跡などから殷代の青銅器がまとまって出土し、すでに殷代から遼西だけでなく遼東にも中原から青銅器が伝来していたことが明らかになっている。さらに、撫順市施家東山遺跡と新賓県色家石棺墓から出土した青銅刀子は、ともに「薄手で銅質が悪く、一見してこの地域において、本来のものを真似て造られたものと判る」ので、「殷周青銅器の伝播の直後に、この地域（遼東）で初歩的な青銅器の鑄造が行なわれた可能性がある」と秋山進

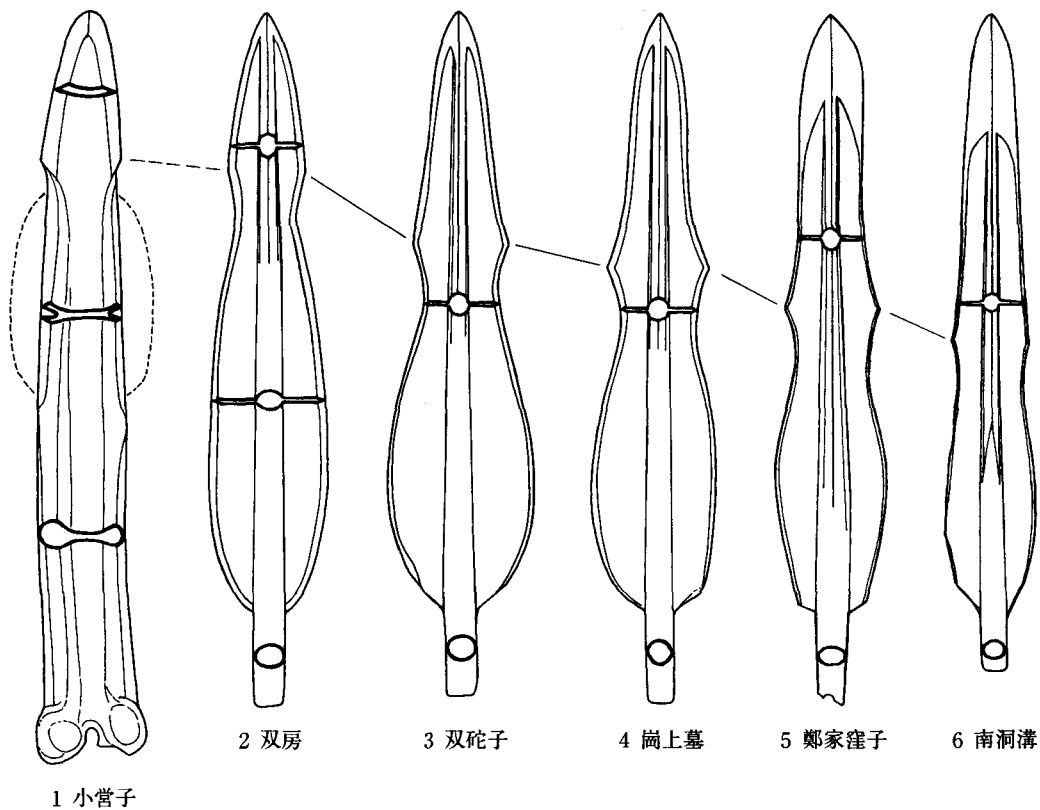


図1 植刃式骨剣(1)と遼寧式銅剣(2~6)(縮尺不同, 身の長さを揃える)

午は述べている[秋山1995:263~264]。そして、遼東の初期の銅剣は「鑄放しのまま」であったり、薄かったり、鬆による小穴があることから、「非実用」で「宝器」であったと秋山は解釈し、遼西の「実用」の銅剣から遼東の初期の銅剣は派生した「異式剣」と主張している[同前:265~266]。しかし、殷代に中原から遼東に青銅器が流入し、刀子を模造していたとすれば、同じ時期か少し遅れて遼東独自の形状をもつ銅剣の鑄造が始まった可能性は否定できない。遼寧式銅剣の起源問題は、実用か非実用かの議論ではないのである。

その一方、問題になっている小黒石溝8501号墓の前9世紀という年代について、伴出の青銅礼器のうち方座簋に鑄出されている「許季姜作尊簋……」の「許」の国は、春秋11年(前712)が文献上の初見であることから、西周前期から西周末期または春秋前期に属する時期の異なる青銅器群の集積であって、同墓の年代は前8世紀後半と甲元眞之は推定している[甲元2005:48]。そして、これまで小黒石溝8501号墓よりも新しく前9世紀とされてきた南山根101号墓のほうが若干古いという。

その一方、銅剣の型式だけから判断すると、棘状突起が南山根銅剣よりも鋒よりに位置する汐子北山嘴銅剣が遼西最古の遼寧式銅剣である。汐子北山嘴銅剣は伴出の簋から判断すると、西周後期から春秋前期、前9世紀中頃から前8世紀中頃で、南山根銅剣と同時期か、または若干くだる。北山嘴銅剣は棘状突起の位置からすると、遼東の双砲子銅剣と並ぶか、それらより若干くだる。ただし、この銅剣については遼東からもたらされたものである可能性も考慮しておいたほうがよい。遼

遼寧式銅劍の遼西起源説の根拠とされてきた南山根の年代について甲元の考えを容れると、遼寧式銅劍の遼東起源説はいっそう確かなものになるだろう。

さきに私は、遼寧式銅劍の起源を植刃式骨劍に求めた〔春成2006：73～75〕。植刃器は、骨製の軸柄に打製石製の刃（細石刃、石刃、両面加工石器など）を植えて槍、ナイフ、短劍、鎌など組み合わせ式の器具に仕上げたもので、前20000年～前1000年頃まで東北アジアだけでなくきわめて広い範囲に分布していた。

中国吉林省小営子遺跡は、興城文化に属し前2000～1500年頃に位置づけられる墓地遺跡である。この遺跡の墓には植刃器の骨製軸（長さ24～20cm）が1基の墓に4～2本副葬されており、その数は合計25本に達している。鹿の四肢骨を材料にしており、その形態は先端をマムシの頭のように三角形（長さ5.5～3.0cm、幅3.0～2.2cm）にふくらませて形作った一群と、先端を尖らせるだけで単純に終わる一群とがある。ともに、両側に溝を彫ってそこに石製刃を植えるようにしている〔藤田1943：61〕。溝は先端の三角形が終わってから始まるので、そこにくびれが生じる。小営子遺跡で副葬されていたのは骨製軸だけで石製刃を植えたものは1点もなかったが、シベリアのアンガラ河流域の遺跡群ではセロヴォ期に属する刃を植えた状態の植刃器が少なからず発掘されており、その状態を知ることができる。それは左右側縁にそれぞれ6～8個くらいの打製両面加工の石製刃を植えており、全体としてはそれぞれ半月形の刃部を呈している。小営子遺跡の骨製軸に刃を装着した状態を復元すると、マムシ頭形の鋒の小さなふくらみに幅狭の木葉形の身がつづく、まさに双房の遼寧式銅劍の原型を彷彿とさせる（図1-1）。

植刃式骨劍から遼寧式銅劍への移行を想定すると、棘状突起が鋒近くに位置し丸味を帯びている遼寧式銅劍が古い。代表的な例は双房や趙王村の銅劍である。それに対して、棘状突起が鋒から離れて突出しているほうが新しい。代表的な例は寺児堡、三官甸、南洞溝の銅劍である。その中間にくる代表的な例が十二台営子や崗上墓の銅劍である。その変化はもっぱら、身の下端から棘状突起までの距離は固定しておき、棘状突起から鋒の先端までの距離を延長することによって生じている（図1）。遼寧式銅劍のこのような変化の方向は、朝鮮半島の細形銅劍にいたると、棘状突起が関に近い位置にまで下がってきて、大きく変化する⁽¹⁾（表1）。

2) 朝鮮半島の遼寧式銅劍の起源

朝鮮半島の遼寧式銅劍は、長い間、忠清南道扶余松菊里石棺墓出土の身の下半が著しく幅広の型式（広葉型）が最古の位置を占めていた。しかし、1996年、忠清南道大田比来洞1号支石墓から、欣岩里式土器に伴う遼寧式銅劍が見つかり、松菊里銅劍に先行する型式の存在が明らかになった〔成1997〕。そして、それ以前に黄海北道仙岩里石棺墓や黄海南道大雅里石棺墓から見つかった銅劍も再加工されて本来の形態は損なわれているが、松菊里銅劍に先行する「孔列文の時期、少なくとも無文土器時代の前期後半まで確実にさかのぼり」、遼寧「I式劍の再加工品」と位置づけが変更されることになった〔武末2004：136～139〕。

これらの3点はいずれも劍心が鋒の先端までのびており、劍心が鋒の先端から離れていく松菊里銅劍以降とは明らかに区別できる。比来洞銅劍は鑄造後の加工変形があるので、型式学的操作をおこなう前に本来の形状を推定することが必要である。その作業は困難であるけれども、復元を試み

遼東との年代的な関係を追究することにしたい(図2)。

比来洞銅剣の特徴は、全体の長さが著しく短い、棘状突起の存在ははっきりしていることである。そして、刃の形態は棘状突起の前で一度内湾し、その後ろでもう一度内湾するので、棘状突起の先は少し尖っている。鑄造後に研いで棘状突起を新たに作り出したのではないとしても、鋒の先端から突起付近までの形状は変形して短くなっている可能性は否定できない。そこで、鋒の先端から棘状突起までの距離を調べると遼東の双房銅剣に近い。ただし、双房銅剣では棘状突起が丸味を帯びているのに対して、比来洞銅剣のように尖っていない。また、全長16.9cmの比来洞銅剣が、本来は双房銅剣のように全長26.6cmに達するようのものであったという保証はない。遼寧式銅剣のなかでは、棘状突起が鋒に近く位置し丸味を帯びているほうが古いとみるならば、比来洞銅剣は双房銅剣よりも若干新しいのであろう。

比来洞の遼寧式銅剣は、松菊里銅剣よりも古く、欣岩里式土器の炭素14年代(較正年代)が前11～10世紀であることを考慮すると、比来洞銅剣は前11～10世紀までさかのぼり、おそらく遼東の双房銅剣に近いのではないかと私は推定する。

仙岩里銅剣は剣身が中ほどで内湾しており、曲刃式ではあるが、棘状突起は著しくない。内湾している個所のカーブを参考にして、その位置を推定すると、双房銅剣と重なるという印象である。

大雅里銅剣も、曲刃式であるけれども棘状突起は発達していない。しかし、内湾している個所の位置を手がかりにすると、双砬子銅剣や二道河子銅剣に近い。身の幅が遼東の銅剣とくらべると、はるかに狭いのは、朝鮮半島の特徴なのであろう。

以上のように、棘状突起の位置すなわち鋒の長さを基準にとると、朝鮮半島最古の銅剣は、比来

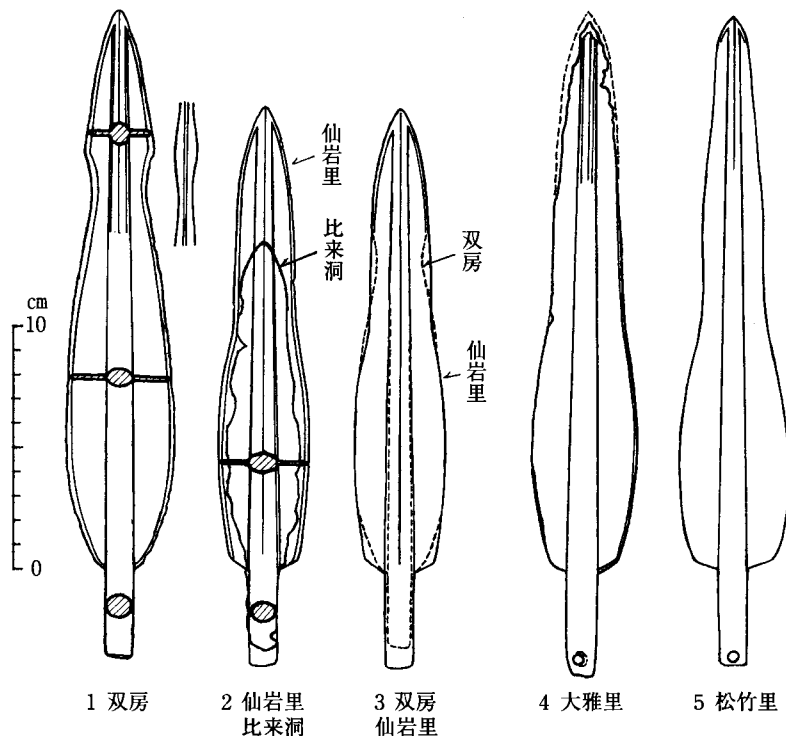


図2 遼寧最古の銅剣と朝鮮半島最古の銅剣

洞銅剣・仙岩里銅剣→大雅里・松竹里銅剣の順に新しくなると推定できる。伴出の磨製石鏃の型式が凹基無茎式から凹基有茎式へと変化していく過程から判断しても、同様の結果が得られる。なお、仙岩里→大雅里銅剣は、遼東の最古銅剣の影響をうけて成立したとしても、遼東のものとは明らかに異なる形態をもっているため、これらをも遼寧式銅剣と呼称するのは一考を要する。

表1 朝鮮半島および遼寧地方の古式遼寧式銅剣と古式細形銅剣

(単位はcm, 鋒長は鋒の先端から棘状突起の位置までの距離, カッコ内数字は復原値を示す)

銅 剣	全長	身長	鋒長	身幅	茎幅	鋒長/身長
比 来 洞	16.9	14.0	6.0	(3.4)	1.4	0.43
仙 岩 里	22.5	18.6	—	4.0	1.2	—
大 雅 里	27.0	22.8	(7.5)	4.3	1.2	0.33
松 竹 里	26.7	22.6	8.0	4.6	1.1	0.35
松 菊 里	33.6	30.3	14.6	6.6	1.3	0.48
中 央 博	(35.0)	(30.8)	(14.7)	5.0	1.3	(0.48)
龍 興 里	26.4	23.1	12.5	3.2	1.5	0.54
東 西 里1	32.0	29.4	21.6	4.0	1.8	0.73
槐 亭 洞	32.4	28.3	20.4	4.7	1.5	0.72
東 西 里2	31.6	28.3	18.5	3.5	1.5	0.65
双 房	26.6	23.0	6.0	4.5	1.2	0.26
趙 王 村	26.6	23.0	8.2	4.7	1.2	0.36
双 砬 子	27.3	23.6	9.2	5.8	1.2	0.39
二 道 河 子	28.8	25.2	10.2	6.2	1.0	0.40
汐子北山嘴	30.0	25.8	10.2	(5.2)	1.4	0.40
崗 上 墓	29.4	25.0	10.7	5.4	1.2	0.43
十二台營子	32.6	28.4	13.1	5.6	1.4	0.46
寺 兒 堡	32.7	28.4	14.1	4.4	0.9	0.50
南 洞 溝	34.9	31.5	17.3	4.7	1.2	0.55

こうして、仙岩里例をⅠ式、大雅里例をⅡ式、松菊里例をⅢ式、身の幅が狭くなり棘状突起が退化した出土地不明例（韓国国立中央博物館蔵）をⅣ式とするⅠ～Ⅳ式の4段階を想定してみよう。しかし、Ⅱ式とⅢ式との間にはヒアタスがあり、直接的な連続性を認めることは現状ではできない。Ⅲ式の成立にあたっては、遼東の二道河子銅剣のような身の下半が幅広い銅剣のつよい影響があったことを考えざるをえないだろう。以上の銅剣型式と土器型式との関係を示すと、次のとおりである（表2）。

表2 朝鮮半島の土器型式と銅剣との関係

土 器	銅 剣	北部九州
羨沙里式		
+		黒川(古)
可楽洞式		黒川
欣岩里式	Ⅰ 比来洞	黒川(新)
休岩里式	Ⅱ 大雅里	夜白Ⅰ
松菊里式	Ⅲ 松菊里	今川 板付Ⅰ
	Ⅳ 中央博	比恵 板付Ⅱb
水石里式	細形 槐亭洞	

本稿での遼寧式銅剣の実年代の推定については見通しを示したにすぎず、考古学的な作業は不十分であるため、近い将来あらためて取りあげることにしたい。

3) 北部九州の遼寧式銅劍の年代

福岡県福津市（旧、津屋崎町）今川遺跡から出土した銅鏃と銅鑿は、朝鮮半島の松菊里石棺墓出土品のような遼寧式銅劍の鋒と茎をそれぞれ再加工して作ったと推定されている（図3-2・3）。同遺跡の土器は、板付Ⅰ式でも夜白Ⅱb式を伴わないので、福岡平野の板付Ⅰ式よりも新しく、いふならば板付Ⅰb式である。では、今川銅劍は朝鮮半島・遼寧地方の遼寧式銅劍の編年でいうと、どこに位置するのであろうか。

今川遺跡例の再加工される以前の遼寧式銅劍の形状は明らかにしえないけれども、板付Ⅰ式に伴出したこと、遼寧式銅劍を再加工した銅鏃と銅鑿は、朝鮮半島から見つかっており（図3-4・5）、松菊里石棺墓の銅鑿と共通しているので、元になった銅劍も松菊里遺跡と同じⅢ式と考えておきたい。

では、北部九州の弥生人は遼寧式銅劍の破片を入手して銅鏃に加工したのであろうか。むしろ、全羅南道德峙里15号支石墓に遼寧式銅劍を再加工した銅鏃が存在したことから、銅鏃に再加工した製品が北部九州に持ち込まれた可能性のほうが高い、と私は考える。この資料によって、朝鮮半島の松菊里の遼寧式銅劍すなわち松菊里式土器と北部九州の板付Ⅰ式土器との併行関係を追認しておきたい。

福岡市比恵遺跡の第25次調査でSK11から板付Ⅱb式土器を伴って出土した劍形木製品も重要である（図4-2）。身は脊柱をもち、鋒より抉りをいれて曲刃を表現し、関の末端も斜めに削ぐ

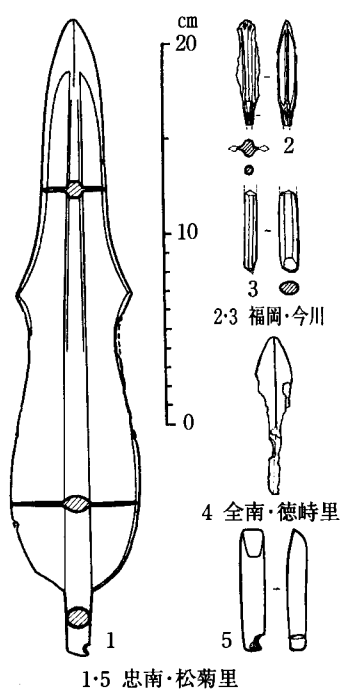


図3 遼寧式銅劍とその再生品

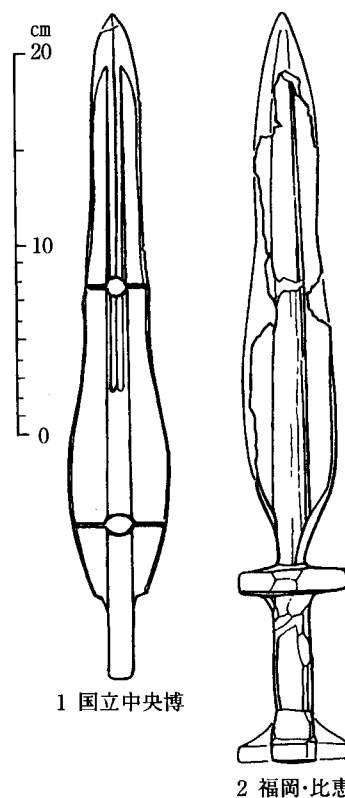


図4 遼寧式銅劍Ⅱ式とその木製品

ように終わっているの、遼寧式銅剣を木で模倣したものであることは確かである。身の幅はせま
く、袂りの位置は身の中央、やや鋒よりにあるけれども、遼寧式銅剣のばあいは棘状突起が著しい
のに、この木製品には表現されていない。遼寧式のなかでもっとも新しいIV式をモデルにした結果
なのであろう(図4-1)。しいていえば、遼寧式銅剣IV式が弥生前期後葉、板付Ⅱb式頃に北部九
州に持ち込まれて木製品として模倣されていることから、両者は併行関係にあることを示唆してい
る。炭素14年代を較正すると、前6～5世紀のことであろう。

③……………青銅器鑄造の開始年代

1) 銅鉈の鑄造年代

和歌山県御坊市湯川町堅田遺跡から1999年に鉈の鑄型が発掘された(図5-1)[川崎編2002]。
鑄型は、石材は砂岩、縦6.5cm、横幅6.0cm、厚さ6.1cmの小片で、鉈の先端付近で残存する
長さ4.0cm、幅約2.5cmの形が彫り込んであり、その部分は熱をうけて黒変している。鑄造炉の
遺構や溶炉片、羽口片のほか報告者が小銅鐸もしくは銅鐸の中子と推定した小片も見つかっている
ので、ここで実際に銅鉈を鑄造した可能性は高い。弥生前期末の土器を伴っており、青銅器鑄造が
この時期までさかのぼることを示す唯一の青銅器製作例である。この遺跡は、南北の長さ最大約
80m、深さ1.5mの三重の環壕をもっており、その内側から10棟の住居跡が発掘されており、そ
のなかには松菊里型住居も3棟ふくまれている。朝鮮半島または北部九州からの渡来者がいたこと
を示唆しており、渡来者が青銅器の鑄造技術と青銅器の原材料をもちこむことによって初めて銅鉈
の鑄造は可能であったのだろう。

鉈は、北部九州では弥生中期の福岡県小郡市三沢北松尾口、久留米市道蔵、佐賀県鳥栖市柚比本
村、佐賀市本村籠、武雄市釈迦寺などの遺跡で見つかっている(図5-4～6)[片岡1996]。中期初
めが初現で、大部分が中期前葉までの時期に収まる。鑄型は佐賀県三日月町土生遺跡と福岡県添田
町庄原遺跡で見つかっている(図5-2・3)。時期は、中期初め～前葉であって、前期までさかの
ぼる例は皆無である。土生遺跡などでは、朝鮮半島の無文土器が土着化した「擬朝鮮系無文土器」
が多数見つかっており、朝鮮半島から渡来した工人がいて、青銅器の鑄造が始まったことを暗示し
ている。

堅田遺跡の鑄型は、近畿の弥生前期末の時期に位置づけられる。では、北部九州に先駆けて近畿
で青銅器の鑄造が始まったといえるのであろうか。北部九州では、かつて遠賀川式土器に含まれる
金海式甕棺は弥生前期末に位置づけられていたが、伴出の小型壺に明らかに城ノ越式に属するもの
があるので、金海式は前期末と中期初めとに分けられることになった。このように、北部九州の前
期末の様相をもつ土器の一部が中期初めに位置づけられるようになっているので、堅田遺跡の前
期末の土器についても、北部九州の中期初め、城ノ越式土器の初め頃と一部併行する可能性は否定で
きない。北部九州と近畿の前期末、中期初めの実年代に関する炭素14年代の測定値を蓄積し、比
較検討する作業が必要である。

堅田遺跡の鑄型にはもう一つの問題が内在している。佐賀県土生遺跡の鑄型が幅3.2cm、厚さ

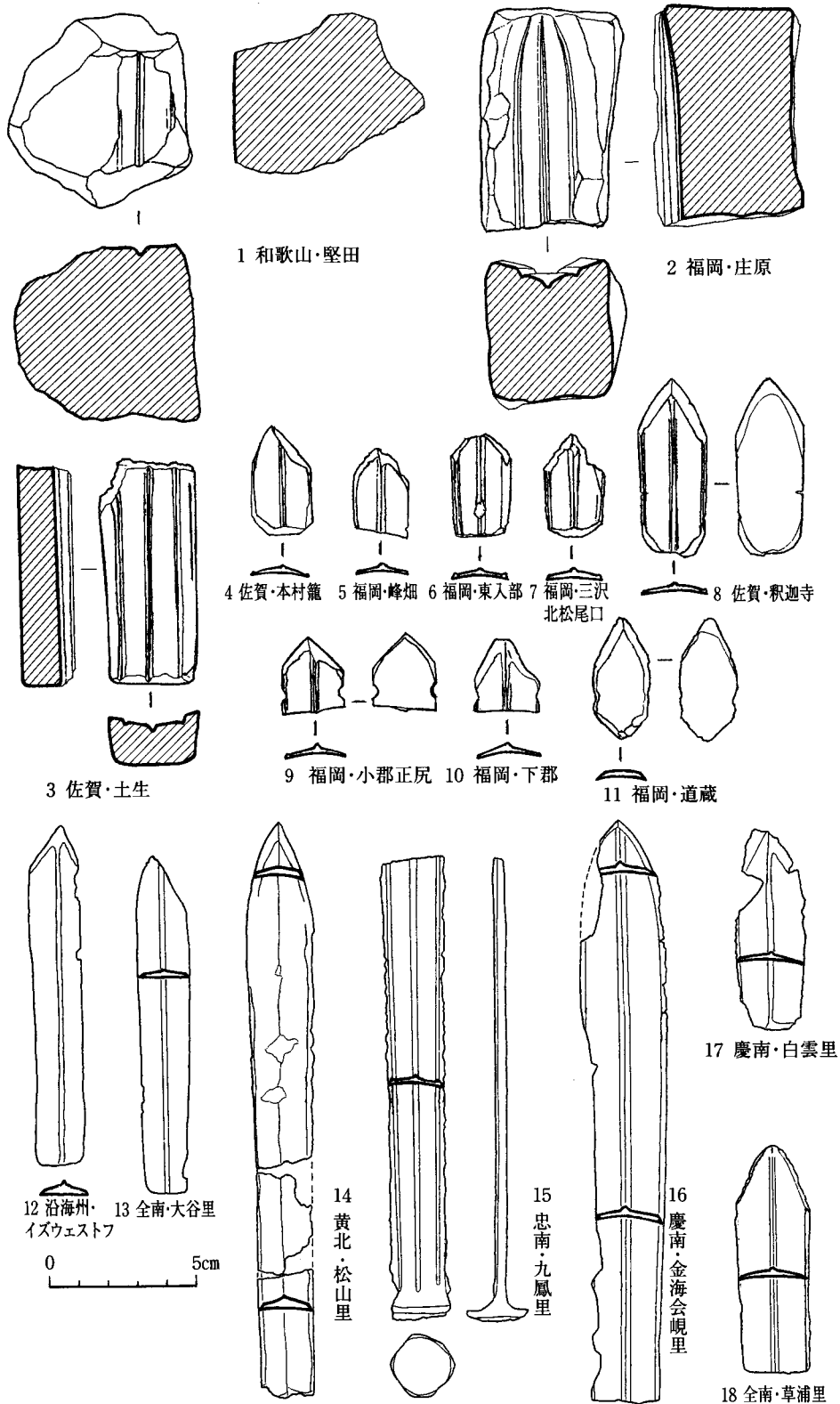


図5 日本・沿海州・韓国の銅鉞とその鑄型[川崎編 2002, 片岡 1996]

1.8 cmで、鉈の形・大きさに見合った幅と高さをもっているのに対して、堅田の鑄型は鉈の大きさとは無関係の幅と厚さをもっていることである。これは、他の青銅器の鑄型の破片を再利用した可能性を示している。近畿地方でこの時期までさかのぼって鑄造される可能性がある青銅器の候補としてあげられるのは、銅鐸をおいてほかにはない。堅田の鑄型片から銅鐸の鑄造が弥生前期末までさかのぼる可能性があることだけは認めなければならないけれども、その問題に関してはのちに取りあげることにしたい。

朝鮮半島では銅鉈は朝鮮青銅器文化Ⅲ-1期に大谷里・論山などで多鈕細文鏡・八珠鈴・双頭鈴などとともに出現する(図5-13~18)。

現状では、北部九州では青銅器の鑄型の確実な最古例は中期初めないし前葉までしかさかのぼらない。しかし、銅戈には北部九州独特の型式が中期初めに知られているので、北部九州における青銅器の鑄造は中期初め、前4世紀中頃ないし後半までさかのぼるとみられる。

2) 銅戈の鑄造開始年代

朝鮮半島では、朝鮮青銅器文化Ⅱ-1期に槐亭洞などにまず細形銅劍が現れたあと、Ⅲ-2期にいたって全羅南道草浦里・忠清南道九鳳里などで細形銅戈と細形銅矛が加わる。朝鮮半島の細形銅戈の起源は遼西の「異形戈」すなわち遼西式銅戈であることが、最近の小林青樹と石川岳彦の研究で明らかになっている(図6-1)[小林・石川2006]。

それに対して、北部九州では福岡市吉武高木遺跡3号木棺墓に副葬されていた細形銅劍2、細形銅矛1、細形銅戈1、多鈕細文鏡1は、それらに伴った壺形土器から弥生中期初めに比定された。細形銅戈は、断面円形の脊柱をもち、身は肉厚の作りで十分に実用になる武器である(図6-4)。

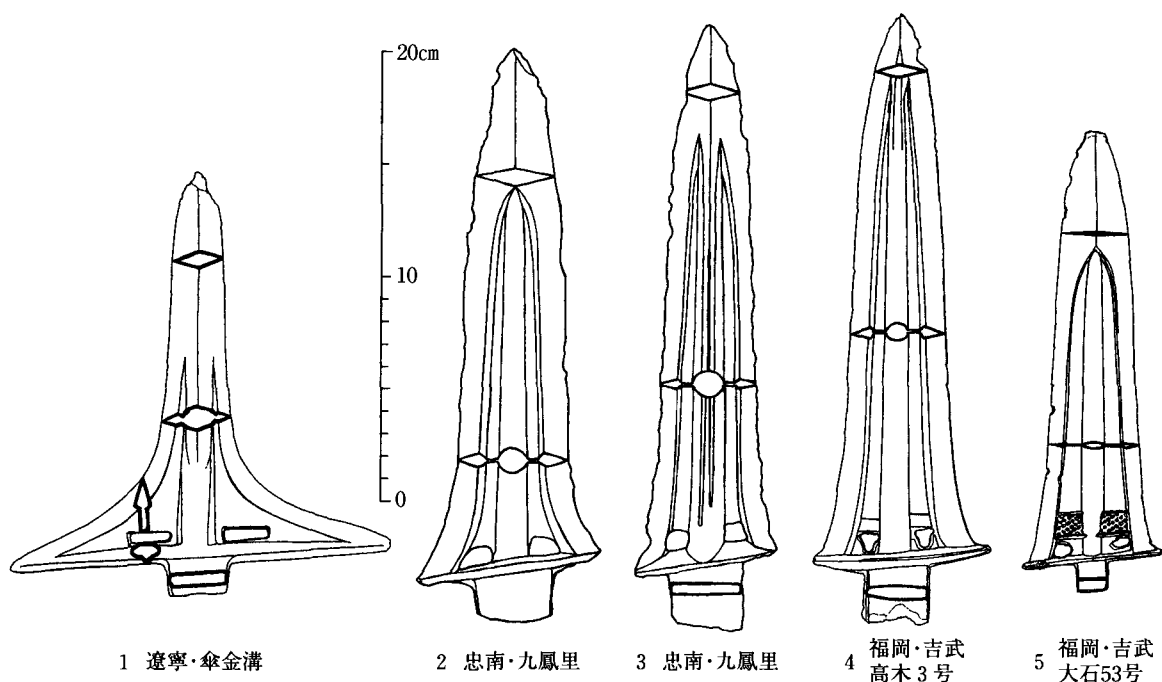


図6 遼西式銅戈と朝鮮式銅戈および北部九州の銅戈

朝鮮半島で鑄型が見つかっており、分布の中心も彼の地にあるから、搬入品と考えてよいだろう。この型式の銅戈は、近年、熊本市八ノ坪遺跡から石製鑄型が発掘されており、中期初め～前半に少なくとも中九州で鑄造されていたことがわかっている。

その一方、隣接する吉武大石遺跡の53号甕棺に副葬されていた細形銅戈も、甕棺の型式から中期初めと認定された。しかし、この銅戈は特別に薄い作りで、内は小さく薄いので、とても実用とはいえない、祭器としての戈である(図6-5)。すなわち、武器と祭器の二種類が併存する形で日本列島の銅戈の歴史は始まったのである。樋の下端、穿の前に斜格子文帯を施した型式の細形銅戈は北部九州から5点発見されているだけで朝鮮半島からの発見は皆無であるので、鑄型はまだ見つかっていないけれども、北部九州産と推定されている。弥生青銅器では、中期初めに銅戈に特別な意味を付与して早くも独自の型式をもつ製品の鑄造を始めたことになろう。

3) 銅鐸の鑄造開始年代

最古銅鐸を製作した時期と場所について、弥生前期末(弥生I期新段階)までさかのぼること、近畿中央部であることを佐原真は早く予想していた[佐原1960a・b]。しかし、最古のI式(菱環鈕式)に属する島根県神庭5号銅鐸(図7-11)がII-1式銅鐸や中広形銅矛といっしょに見つかったように、伴出遺物による証明は難しく、製作した鑄型を当時の堆積層のなかから見出すことが必要であった。

2004年、I式銅鐸の鑄型がついに見つかった。ところが、出土した遺跡はまったく予想外の愛知県名古屋市西区朝日遺跡であった。その鑄型は砂岩製で、身の最上部で舞を含まない高さ3.6cm、幅3.0cmのきわめて小さな破片である(図7-14、図8-1)[名古屋市見晴台考古資料館(伊藤)2005、野澤・野辺地2006:131~132・150、難波2006]。鑄型内面のカーブから推定すると、高さ20cmくらいの小型銅鐸の鑄型である。文様は最上部の横帯の一部だけが判明し、最上部の第1横帯は斜格子文帯(幅9.5mm)で、その直下に間隙をあけずに羽状文帯(復元幅18.0mm)を施しているのが大きな特徴である。羽状文は無軸で、並行斜線の方向を途中で反転させており、く字形と逆く字形のつくる三角形の空間をV字形の線をいれて埋めているのが大きな特徴である。

斜格子文と羽状文の横帯というと、日本の銅鐸のなかで最古の横帯文銅鐸である島根県神庭5号銅鐸の文様構成と共通する。ただし、神庭5号銅鐸では、身の上端から第1横帯は斜格子文で、その直下に下向き鋸歯文と斜格子文を3帯つづけて重ねたあと、無文の区画をおいて羽状文帯、そしてまた無文の区画をおいて斜格子文、下向き鋸歯文を配置しており、朝日鑄型の文様構成と完全に一致するわけではない。朝日鑄型は、神庭5号銅鐸の斜格子文・鋸歯文・斜格子文からなる第1横帯群を斜格子文・羽状文に置き換えたものと考えることができる。そして、兵庫県洲本市中川原銅鐸(図7-12)の斜格子文1帯のみからなる第1横帯は、朝日鑄型の羽状文を省略したものと解釈することができるだろう。すなわち、神庭5号銅鐸→朝日銅鐸鑄型→中川原銅鐸の順に変遷し、文様の簡略化が進み、斜格子文のみの1帯とする身の第一文様帯が定型化したと考えることができる。

出土地不明・東京国立博物館35509号銅鐸(図7-10)は、研究史のうえでは長い間、横帯文銅鐸とみなされ最古の位置を占めていた。しかし、明らかに縦帯も施文された4区袈裟摺文であって、銅鐸の変遷史では最初から4区袈裟摺文が存在している[春成1984:40~41]。

朝日鑄型が、菱環鈕式のなかでも古いI-1式に属し、その変遷過程に確かに位置することはまちがいないだろう。そして、東博35509号銅鐸は神庭5号銅鐸と比較すると、丈は高いが分厚い鈕をもっていること、第1横帯と第2横帯の間隔がきわめてせまいこと、第3横帯が斜格子文帯を2段重ねていることなど、神庭5号銅鐸と中川原銅鐸の間に位置づけるよりも、神庭5号銅鐸に先行すると考えるならば、朝日鑄型は現状では3番目に作った銅鐸の鑄型ということになる。

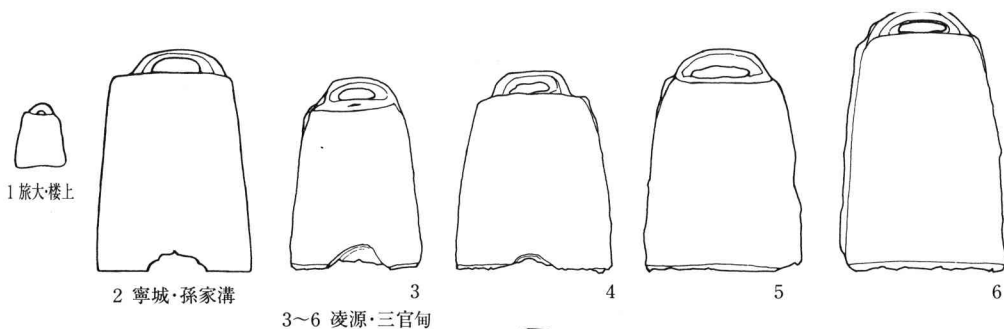
この鑄型が埋まっていた層は弥生中期初め(Ⅱ-3期)の朝日式土器(近畿のⅡ期新段階)の時期である。弥生前期(I期)の土器は皆無であり、鑄型は小破片であるけれども磨滅はしていないし、出土の状況からすると、時期比定に誤りはないだろう。鑄型が出土した住居跡や炉跡など(SB02-SK03, SB04)出土の木炭の炭素年代を測定し較正したところ、360~90 calBC(95.4%)、370~190 calBC(95.4%)、380~200 calBC(95.4%)の年代が得られている[小林紘一ほか2006:242~243]ので、前4~前3世紀とみてよいだろう。すなわち、これまでの弥生中期初めの年代測定例と矛盾するところはない。とすると、鑄造関連の遺物・遺構は伴っていないけれども、最古の銅鐸は中期初め、前4世紀中頃~後半に名古屋付近で鑄造された可能性がでてきたといえるだろう。

このことは、I-2式に属する岐阜市十六町銅鐸(図7-13)も、濃尾平野で鑄造された可能性があることを示唆する。十六町銅鐸で、a面の身の第二文様帯に有軸羽状文つまり綾杉文、b面の鈕の外斜面に有軸羽状文を施しているのは、朝日鑄型の身の第一文様帯群の羽状文を継承しているようにみえるからである。

問題は、朝日遺跡の鑄型に彫り込んである斜格子文と羽状文、そしておそらく鈕や下辺横帯に施してあった鋸歯文の系譜である。これらの文様は、同時期の土器に存在するのであろうか。鑄型に伴出した朝日式土器の壺の小片は外面に貝殻条痕を施している。胴部には櫛描文または縄文が施してあったのであろう。斜格子文、羽状文そして鋸歯文は、濃尾平野の前・中期の土器には皆無であり、近畿地方の土器では斜格子文は前期中頃の壺の胴部に、羽状文は前期中頃~後半の壺の胴部や口縁端に、複合鋸歯文は前期末の壺の胴部にみられる(図8-4~14)。そして、羽状文は近畿地方よりも北部九州から関門地方の弥生前期に盛行した文様で、関門地方では中期初めまで存続している。さらに、神庭5号銅鐸や朝日鑄型の羽状文は、斜線の方向を違った個所に生じるV字形の余白にV字形の線1本をいれて填めている。このような特徴をもつ羽状文は、弥生土器では滋賀県守山市小津浜遺跡出土の前期中頃の壺の例しか私は知らない。しかし実は、まったく同じ菱形文と羽状文を組み合わせた文様を彫刻した木製堅杵が石川県小松市八日市地方遺跡から出土している[橋本2003:361, 363]。その時期は弥生中期初め頃であるから、朝日鑄型の年代と一致する。最古の銅鐸は、弥生中期初め頃に近江から北陸の集団とも何らかの関係ももちながら濃尾平野の集団が創出した蓋然性は高くなったといえるだろう。こうして、朝日鑄型の発見によって、京都府向日市鶏冠井銅鐸鑄型や福井県三国町下戸下屋敷銅鐸鑄型もあらためて問題にしなければならなくなった。

鶏冠井銅鐸鑄型は伴出土器から中期初めとされる小破片であって(図7-15)、発見当時は類例がなかったので慎重を期して筆者はその型式をI-2式ないしⅡ-1式と幅広くとっておいた[春成1984:41~43・47]。下屋敷銅鐸鑄型は身の形を彫っただけの未完成品で(図7-16)、その形・大きさはI-1式中川原銅鐸にもっともよく類似している。伴出土器は中期初め~前半とされている。I式銅鐸の鑄型の可能性がある3点は、愛知、京都、福井からの出土であり、京都はともかく愛知、

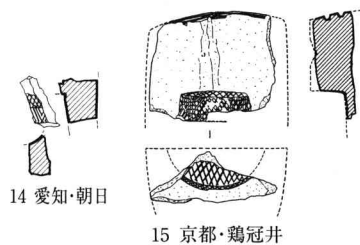
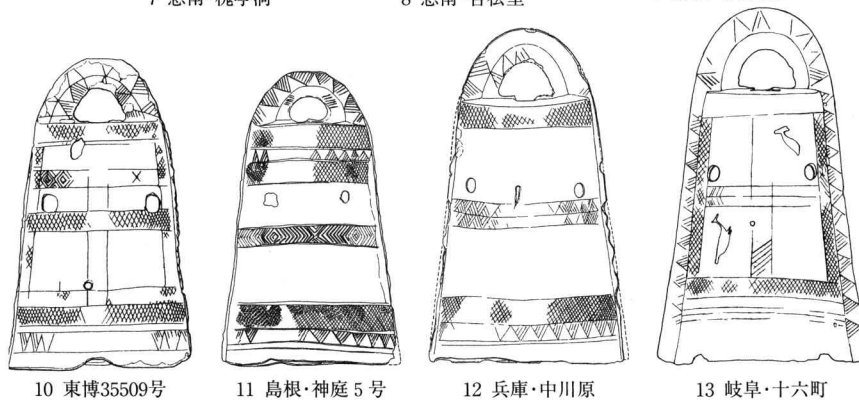
遼寧青銅器文化



朝鮮青銅器文化



弥生青銅器文化



0 10 20cm

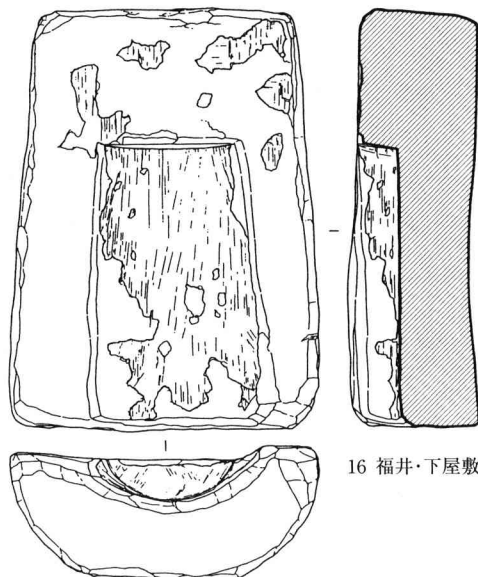


図7 銅鈴から銅鐸へ

福井は従来の予想よりも東に偏っていることは否定できない。ただし、さきに取りあげた銅鉦の鑄型を出土した御坊市堅田遺跡のばあいも同様で、和歌山で青銅器が鑄造されていたことはまったく予想外のことであった。しかし、堅田遺跡の住居跡に朝鮮半島起源の松菊里型が含まれていた事実は、愛知、京都、福井などそれまで予想もしなかった各地で初期の青銅器鑄造が始まる契機について示唆するところが大きい。

最近、中期前葉の銅鈴（小銅鐸）・銅戈・銅矛の石製鑄型が見つかった熊本市八ノ坪遺跡や銅矛の鑄型が見つかった同市白藤遺跡のばあいも、これまでに知られていた北部九州の初期青銅器の鑄造地域である有明海北岸の佐賀平野のはるか南方に位置している。そして、朝鮮半島系の無文土器を伴出しており、朝鮮半島からの渡来者の存在を暗示している。

最古銅鐸の鑄造がどこで始まったのか、朝鮮半島からの技術工人の渡来があつてそれは可能になったとすれば、朝鮮半島のどこと結びつくのかについての検討が必要である。

日本列島の銅鐸の起源は遠く中国の龍山文化から夏・商・周代の銅鈴にあり、それが朝鮮半島の銅鈴を経て伝来したものである。その直接の祖型としては、忠清南道扶余合松里遺跡の墓から見つかった無文の銅鈴がそのもっとも有力な候補である（図7-8）[春成1994：180～182]。高さ16.3cmで大型化し、鈕の断面は杏仁形、内面裾に突帯をめぐらせ銅舌をもっている点は、銅鐸と共通している。合松里の伴出品には細形銅劍・銅戈に加えて鉄斧や鉄鏝がある。朝鮮青銅器文化Ⅲ-3期に属し、墓は前3世紀頃と推定される。しかし、銅鈴は長期にわたって使われたらしく、伴出した他の青銅器にくらべると磨減がすすんでいる。銅鈴は1時期さかのぼる草浦里・九鳳里などと同じⅢ-2期で前4～3世紀頃と考えることもできる。合松里の銅鈴に先行し、系譜的につながる銅鈴がⅡ-1期の大田市槐亭洞遺跡にすでに存在する（図7-7）ので、Ⅱ-2期からⅢ-2期にも当然存在したと考えられるからである。槐亭洞遺跡の銅鈴は高さ11.7cmの小型で無文、鈕の断面は杏仁形、内面裾の突帯はない。銅劍は最古の細形銅劍である。ここから出土した防牌形銅飾りは、遼西の十二台營子墓出土の人面銅飾りが変化したもので、それがさらに変化したものが南城里遺跡例である。十二台營子を春秋前期、前8世紀と推定、槐亭洞を春秋後期、前6～5世紀頃、南城里を春秋後期～戦国前期、前5世紀頃と推定し、日本列島最古の銅鐸は槐亭洞—合松里系列の銅鈴のどこか、弥生中期初め、前4世紀中頃～後半と考えておきたい。

朝鮮半島で青銅器文化の系譜をひく銅鈴、防牌形銅飾り、ラッパ形銅器、多鈕粗文鏡など古式の青銅器類が細形銅劍とともに見つかっているのは、忠清南道を中心とする中央部の西側である。これらの青銅器のうち、人面銅飾りを出土した十二台營子遺跡は朝陽市、ラッパ形銅器を出土した鄭家窪子遺跡は瀋陽市でも西端に所在し、遼寧でも遼西の青銅器文化との関係が深いようである。東海・近畿の銅鐸の出現には、おそらく遼西の青銅器文化の系統をひく朝鮮半島西海岸の鑄造者がかわっていたのであろう。

銅鐸を製作するには、鑄造技術を身につけた工人の渡来と、原料となる青銅の運搬が必要であつて、弥生人と朝鮮半島との人的交流なしには銅鐸の創造はありえなかつた。銅鐸の起源についても、その祖型と年代はしぼられてきつつある。

④……………弥生青銅器の成立

日本列島における青銅器の鑄造は、近畿では弥生前期末に銅鉞、北部九州では中期初めに銅戈、銅矛、銅鉞などから始まる。ただし、近畿の前期末の最後の部分は北部九州の中期初めの最初の部分と重なる可能性がある。

1) 二種の銅戈の意義

北部九州で鑄型がまだ見つかっていないけれども、その独特の形状と文様から銅戈の鑄造は中期初めには始まっていたと考えられている。

しかし、北部九州で鑄造が始まった銅戈は、最初から援の基部に斜め格子文を施し、先端は尖鋭でなく厚さは薄く、実用の武器として使えるものではない。

しかし、福岡市吉武高木遺跡の1号木棺墓に副葬されていた銅剣・銅戈・銅矛の3点セットのなかの銅戈は武器として十分な刃部の鋭さと厚さをもっている。

朝鮮半島から日本列島に伝来した銅戈は、実用の武器として戈と、一種の祭器としての戈の二つの機能をもって北部九州で鑄造が始まった。

したがって、北部九州の弥生人は銅剣・銅戈・銅矛の3点セットを同時に知ったことになるけれども、そのうち銅戈が真っ先に実用から離れて儀器化していくのには、理由があるのであろう。

弥生時代の戈の特徴についてとりあげてみよう。1) 北部九州では武器をかたどった石器はもっぱら石戈である。2) 武器形木製品のなかでもっとも多いのは木戈である。3) 弥生土器に描かれた武器の絵は銅戈だけが選ばれている。4) 弥生土器に描かれた「戦い」の絵では「戦士」は戈と盾をもっている。5) 東日本の有角石器や有孔石剣の祖型は近畿の石戈である[春成1999:130~131]。

弥生土器に描かれている戦士の図像とまったく同じといえるほど酷似しているといえる戈と盾をもつ人の記号が商代の青銅礼器に書かれている。私は、『周礼』に記述されている方相氏との歴史的関連を考慮し、方相氏が邪悪を祓うという思想は弥生時代のうちに渡来したことを考える。そうであれば、銅戈と盾の流入と方相氏の思想とはセットとして伝ってきたことになる[春成2004:40, 2007:88~91]。その後、小林青樹も同じような結論に達している[小林2006]。方相氏は四つ目の仮面をかぶり熊皮を蒙り、朱色の下着、黒色の上衣を身につけ左手に盾、右手に戈を持つ。「方相」は方形の仮面をかぶった相の人という意味であり、その起源は熊の毛皮を剥ぎとって、頭からかぶり熊に扮装した人が、室内の悪疫を駆逐し、君主の埋葬に先だって墓坑内の魍魎を戈で撃つところにある。方相は熊の頭をモデルにして作った仮面が方形であったからである。

2) 銅鐸の成立

その一方、東海西部・近畿では中期初め頃に銅鐸の製作を始めた。日本の銅鐸とその祖型となった朝鮮半島の銅鈴とを比較すると、銅鐸は文様をもっていること、より大型化していることの2点において、大きくちがっている。この地方で初めて銅鐸を製作するときに、製作工人は祖型になかった文様を施すことが社会的な要求として存在したわけである。では、銅鐸の文様にどのような

機能を期待していたのであろうか。

弥生前期の土器の文様を代表する流水文は中部地方の浮線文に、木葉文は北陸の晩期中葉の文様に、重弧文は東北地方の2条隆帯に、羽状文は東北地方の大洞A式土器の「矢羽根状沈線文」に起源があることが指摘されている[佐原1972, 設楽2004・2006, 小林青樹2006 および小林教示]。東日本の縄文晩期には斜格子文もある。

弥生前期の遠賀川式土器の文様の多くは、東日本の縄文系の文様に出自をもっていると説明することができるようになってきた。すなわち、遠賀川式土器の成立にあたって東日本系の人の思考がつよい影響を与えていた可能性が濃厚である。では、大陸系の無文の銅鈴に縄文系の文様を施して弥生時代の銅鐸は成立したとってよいだろうか。そのように主張するには、縄文系の羽状文や斜格子文が中期初めまでどこかに残存しているか、またはI式銅鐸の年代が前期中頃までさかのぼるかなければならないが、朝日遺跡では後者の可能性が薄いことは、すでに述べたとおりである。それでは、どう考えるか。

遼寧・朝鮮の両青銅器文化の銅鈴に共通する要素は無文であるという点である。しかし、これは同時期の青銅器の多くに各種の文様が施されているのと比較すると、少し不自然なことである。

その一方、I式銅鐸のなかでも最古に位置する鳥根県神庭5号銅鐸の身の横帯文のうち、中央の羽状文帯と最下の斜格子文帯は、その上下の無文部から帯全体が高さ2mmほど浮き彫り状に突出しており、上から2番目の斜格子文帯にもその傾向をうかがうことができる(図8-3)。このような特徴をもっているのは、この銅鐸と出土地不明・東博35509号銅鐸(図8-2)、兵庫県中川原銅鐸(図7-12)の3個である。朝鮮半島で無文の銅鈴に植物繊維製の帯紐を巻いて使っていたのに対して、日本の銅鐸ではその帯紐を巻いた状態を石製鋳型に最初から彫りこんでいた可能性はないのだろうか。銅鐸の文様のうち、斜格子文は銅鐸を緊く縛ることに第一の機能があつたとかつて私は述べた[春成1982: 3~6]。羽状文も斜格子文も帯紐で容易に作ることができる造形文様であつて、民族例にもしばしば見られる(図8-15~17)。鋸歯文は、神庭5号銅鐸は、片面では上の鋸歯文は上向き、下の鋸歯文は下向きになっているけれども、反対面では上下とも下向きである。初期の銅鐸では下辺横帯の鋸歯文は先端を下に向けているのが原則である。これは、三角形の小さな布切れを紐で連ねた旗をさげた状態を表現しているのではないかというのが、現在の私の仮案の一つである。

鹿を霊獣視し、その狩猟を控えるようになったのは北部九州では弥生早期、西日本全体では前期からである。また、鳥形木製品は鳥根や大阪では弥生前期中頃に現れる。鹿の絵画は弥生土器では中期初めの福岡市吉武高木遺跡の112号甕棺に例がある。したがって、鹿と鳥に対する信仰の始まりは弥生前期に始まっていた。すなわち、銅鐸や土器に描いている鹿を土地の精霊、サギ・ツルを稲の精霊と信じ、祖霊とともに祭るという信仰の体系が完成した時期は弥生前期末、中期初めという時期であつたのであろう[春成1995: 114~115]。銅鐸は、その金属光沢と金属音によって農耕儀礼の場で神を招くのに使つたと私は推定してきた。それにはさらに、銅鐸を緊縛することによって、何かを結びとめておきたいという願望を加えていたのではないだろうか。

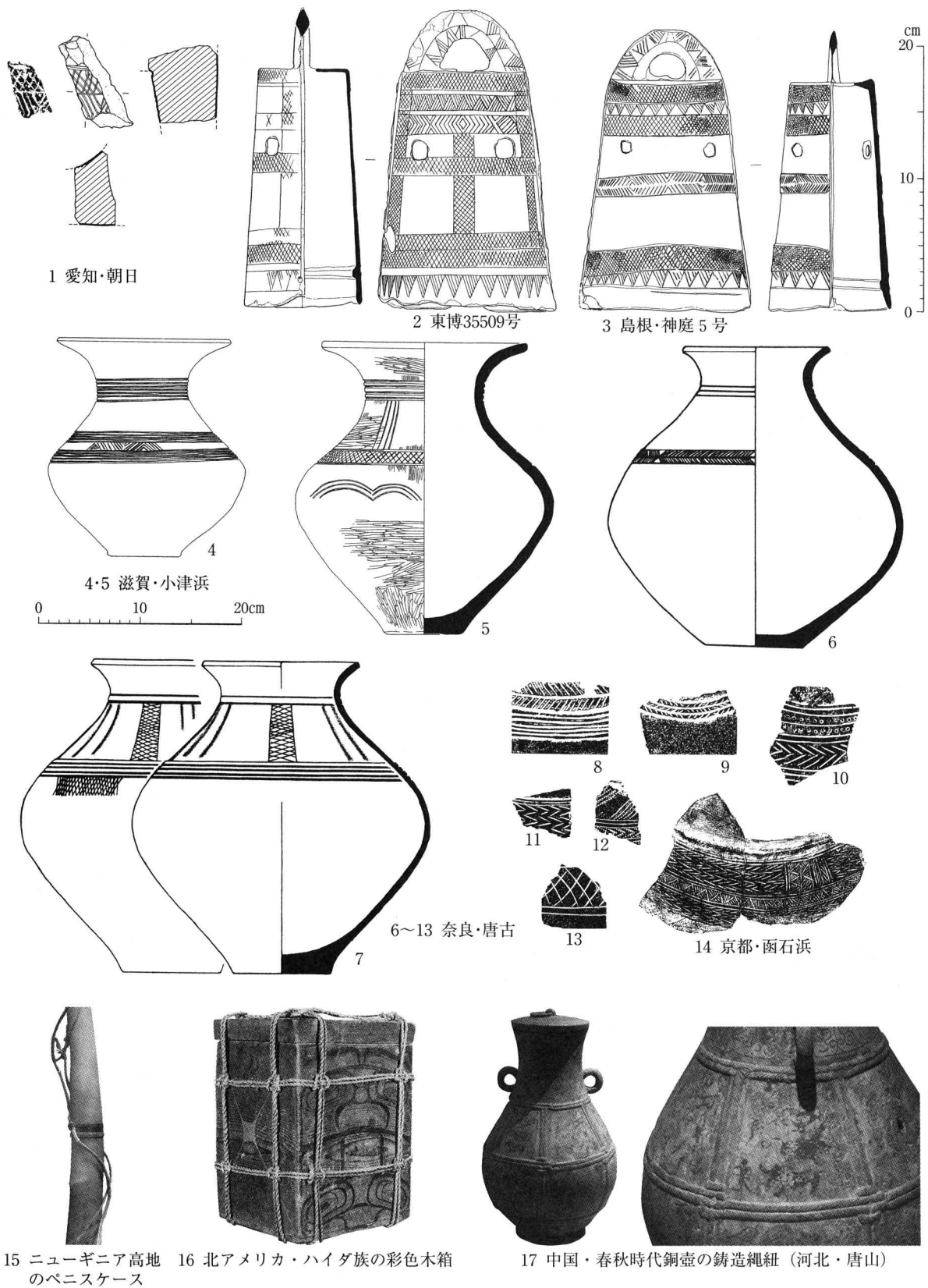


図8 I-1式銅鐸の文様と弥生前期土器の文様および民族例・古代中国例の帯紐表現

3) 弥生青銅器の成立

弥生青銅器は、出現した当初から儀礼との深い関連をもっていた。しかし、青銅器を用いる弥生文化独自の儀礼がその姿を現わすまでには、弥生早・前期の500～600年間を費やしている。

そこには、土偶や石棒を用いる儀礼や、抜歯の儀礼に示される在来の思想が根づよくのこり、突帯文土器を使う側、すなわち水田稲作を受け入れる側に新しい思想を受け入れることに対する抵抗があったことを想定せざるを得ないだろう。突帯文土器と遠賀川式土器との併存の期間は、かつて考えていたよりもはるかに長いものであった。

在来人の子孫、移住者の子孫は、それぞれ数世代だけでなく十数世代の長きにわたって—200年間ないしそれ以上の間—、それぞれの伝統的な信仰と習俗とを守って生きてきたのであって、弥生前期400年間とはそういう矛盾をかかえた時代であった。しかし、それぞれの習俗は、たとえば弥生前期後半には上顎側切歯を抜く大陸系の抜歯様式が採用されたり、中期初めに近畿の縄文土偶をもとにして中部瀬戸内に分銅形土製品が新たに誕生するなど、その後も機会があれば復活再生するような強固なものであった。

銅鐸や銅戈などの青銅器が出現した後の普及の度合い、大型化、施文装飾の展開の状況からみて、青銅器が果たした社会的な役割はきわめて大きなものであったと考えてよい〔春成2002〕。金色に輝く青銅器は、土偶や石棒に代表される縄文的な儀礼を衰退させ、それに代わる農耕儀礼の祭器、そして集団象徴として、そこにこめられた内容は、今日の私たちの想像をはるかにこえるものがあつたのであろう。

謝辞

小稿の執筆にあたって甲元眞之、小林謙一、小林青樹、設楽博己、野澤則幸、藤尾慎一郎の諸氏から教示を得た。深く感謝する。

註

(1)——この考えを提出したあと、黄基徳が双房の銅劍の植刃器起源説を1989年に朝鮮社会科学院考古学研究所の雑誌『朝鮮考古学』に発表していたことを甲元眞之から教示された。すなわち、「この琵琶形短劍の全体の輪郭は、嵌め込み式骨製短劍の形態を連想させるが、最近まで知られた琵琶型短劍の中でも最も初期の型式とみとめられる」〔黄(甲元訳1990:4)〕。そして、「複雑な構造をもつ青銅劍柄が最初から出現していたとは考えられないので、初期の琵琶形短劍はそれと似た、またはそれよりも簡単な木製柄をつくり嵌めたものと推定される。したがって複雑な構造をした青銅劍柄が付いた琵琶

形銅劍は、それがない琵琶形短劍即ち木製劍柄形短劍より、時期的に遅れて編年される」〔同前:13〕。そのうえで、黄は琵琶形銅劍の身の突起部の位置を基準にしてその編年を試み〔同前:14〕、年代は双房石棺墓を前13～前12世紀、二道河子石棺墓・大甲帮石棺墓を前11～前10世紀、美松里遺跡を前9世紀前後に比定している。起源に関しては、その具体例を提示していないけれども、筆者と同じ考えである。年代については、於家村上層の炭素年代の前14世紀を起点にして双房の年代を推定している〔同前:7～8〕。

参考文献

- 秋山進午 1995 「遼寧省東部地域の青銅器再論」(秋山進午編)『東北アジアの考古学的研究』235～245頁, 同朋舎出版。
- 大貫静夫 2005 「最近の弥生時代年代論について」『*Anthropological Science*』第113巻第2号, 95～107頁。
- 岡内三真 2004 a 「東北式銅劍の成立と朝鮮半島への伝播」(春成・今村編)『弥生時代の実年代』181～197頁, 学生社。
- 2004 b 「朝鮮半島青銅器からの視点」『季刊考古学』第88号, 67～74頁。
- 片岡宏二 1996 「青銅製鉞考」『考古学雑誌』第81巻第2号, 129～158頁。
- 川崎雅史編 2002 『堅田遺跡』御坊市教育委員会。
- 黄 基徳(甲元真之訳)1990 「琵琶形短劍文化の美松里類型」『古文化談叢』第22集, 1～16頁。
- 甲元真之 2005 「東アジアの青銅器」『日本列島における祭祀の淵源を求めて』國學院大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム予稿集, 47～57頁, 國學院大学21世紀COEプログラム考古学班。
- 後藤 直 2002 「弥生時代の青銅器生産地—九州—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号, 113～143頁。
- 小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・Zaur Lomtadze・藤根 久 2006 「放射性炭素年代測定」『埋蔵文化財調査報告書54 朝日遺跡第13・14・15次』名古屋市文化財調査報告69, 241～245頁, 名古屋市教育委員会。
- 小林青樹 2006 a 「縄文から弥生への転換」『弥生の始まりと東アジア』第53回歴史博フォーラム要旨集, 26～29頁, 国立歴史民俗博物館。
- 2006 b 「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』第20号, 87～107頁。
- 佐原 真 1960 a 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』2, 日本Ⅱ, 92～102頁, 平凡社。
- 1960 b 「銅鐸文化圏」『図説世界文化史大系』19, 日本Ⅰ, 162～167頁, 角川書店。
- 1972 「流水文」『日本の文様』第8巻, 水, 9～24頁, 光琳社。
- 設楽博己 2004 「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21合併号, 189～209頁。
- 2006 「西日本で出土する縄文晩期終末の東日本系土器」『日本考古学2006』44～57頁, 明治大学博物館友の会。
- 庄田慎矢 2004 「比来洞銅劍の位置と弥生暦年代論(上)」『古代』第117号, 1～29頁。
- 2005 「湖西地域出土琵琶形銅劍と弥生時代開始年代」『湖西考古学』第12号, 35～61頁。
- 2006 「比来洞銅劍の位置と弥生暦年代論(下)」『古代』第119号, 123～158頁。
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告, 第16冊, 桑名文星堂。
- 成 正鏞 1997 「大田新岱洞・比来洞青銅器時代遺蹟」『湖南考古学』諸問題』205～236頁, 韓国考古学会。
- 武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代」『福岡大学考古学論集』131～156頁。
- 名古屋市見晴台考古資料館(伊藤正人)2005 『朝日遺跡第14・15次発掘調査の概要』名古屋市教育委員会。
- 難波洋三 2006 「朝日遺跡出土の銅鐸鑄型と菱環鈕式銅鐸」『埋蔵文化財調査報告書54 朝日遺跡第13・14・15次』名古屋市文化財調査報告69, 189～206頁, 名古屋市教育委員会。
- 橋本正博 2003 「木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ』第2分冊, 遺物報告編, 285～484頁, 小松市教育委員会。
- 春成秀爾 1982 「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集, 1～48頁。
- 1984 「最古の銅鐸」『考古学雑誌』第70巻第1号, 29～51頁。
- 1994 「銅鐸の起源と年代」(明治大学考古学博物館編)『論争と考古学』149～189頁, 名著出版。
- 1995 「祭りと習俗—縄紋的伝統の衰退と農耕儀礼の成立—」(金関 恕+大阪府立弥生文化博物館編)『弥生文化の成立—大変革の主体は「縄紋人」だった』角川選書265, 101～115頁, 角川書店。
- 1999 「武器から祭器へ」(福井勝義・春成秀爾編)『戦いの進化と国家の生成』人類にとって戦いとは1, 121～160頁, 東洋書林。
- 2002 「銅鐸と社会」(佐原 真編)『古代を考える 稲・金属・戦争』209～246頁, 吉川弘文館。
- 2004 「日本の青銅器文化と東アジア」『国立歴史民俗博物館研究報告』第119集, 31～49頁。
- 2006 「弥生時代の年代問題」『弥生時代の新年代』新弥生時代のはじまり, 第1巻, 65～89頁, 雄山閣。
- 2007 「日本の先史仮面」『儀礼と習俗の考古学』55～101頁, 塙書房。
- 藤田亮策 1943 「延吉小営子遺蹟調査報告」『満州国古蹟古物調査報告』第5編, 1～65頁。

-
- 宮本一夫 2000「遼寧式銅劍文化圏とその社会」『中国古代北疆史の考古学的研究』205～235頁，中国書店。
吉田 広 2001「弥生時代の武器形青銅器」考古学資料集 21，国立歴史民俗博物館春成研究室。

(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系)

(2006年6月1日受理，2007年1月31日審査終了)

Date of the Formation of the Yayoi Bronze Implements

HARUNARI Hideji

According to the radiocarbon dates, as calibrated to calendar ages, the Itazuke I phase of the Early Yayoi in northern Kyushu began around 780 BC. The Early Yayoi of the Setouchi area, which parallels the Itazuke II-a phase of northern Kyushu, began sometime between the 8th and 7th centuries BC, while the beginning of the Early Yayoi would date in the Kinki region to the 7th and 6th centuries BC. In other words, the Early Yayoi period began about the time when the Western Zhou ended, and lasted until about the middle of the Warring State Period sometime between 380 and 350 BC.

For archaeological investigation of the Early and Middle Yayoi development, the ages of bronze implements have been particularly important. The earliest well-dated bronze artifacts recovered from Japan are parts of Liaoning bronze daggers that were made into an arrowhead and a chisel, recovered from Itazuke I level of the Imagawa site in Fukuoka Prefecture. Since similar artifacts have been excavated from the Songguk-ri site in Chungcheongnamdo in South Korea, it is likely that the Japanese and Korean samples are about the same age. The Songguk-ri phase has been radiocarbon dated to the 8th century BC, which coincides with the ¹⁴C age of Itazuke I phase in Kyushu.

Moulds for bronze casting provide clear evidence of bronze production. The currently available examples include a mould for spear-shaped planes, recovered from the Katada site in Wakayama Prefecture, which was found in association with the pottery dating to the end of the Early Yayoi period. In northern Kyushu, a mould for planes was found at the Shobara site in Fukuoka Prefecture, associated with the first half of the Middle Yayoi period. By the beginning of the Middle Yayoi period, the bronze halberds placed in burial jars as grave offerings are of the style quite distinct from those found in the Korean Peninsula, suggesting that the bronze were being manufactured in the Japanese archipelago. Since the Early Yayoi period now covers a much longer span of time, it is necessary to examine whether the end of Early Yayoi in Kinki in fact overlapped in time with the beginning of Middle Yayoi in northern Kyushu.

As to *dotaku* (bronze bell) production, a mould for the oldest type was recovered from the Asahi site in Aichi Prefecture, in association with the pottery of the beginning of the Middle Yayoi period. While the presence of the decorative motifs on the body of the bell that are characteristics

of the regions west of Kinki seem to suggest that the beginning of *dotaku* production has some connection with the Kinki region, it does not explain why the decorative motifs of the Early Yayoi of Kinki should appear on a Middle Yayoi bronze bell. The mould for the bronze bells from the Asahi site could not be the definitive evidence to suggest that bronze bell production began in the Nobi Plain.